

逍遙歌

一、春水行きて霧深み

残雪浅き北暝の

丘に集いて文の子が

そらび

双眉に自治を談ずれば

行く手は万里雲湧きて

かりよう

臥龍の意気や清孤吟

せいこぎん

二、若き血潮に潮ざえの

石州埠頭に波静か

せきしゆう

歡樂つきて声もなく

こうじん

黄塵の世を低く見て

夏雪ふめる客人の

かくじん

そい

楚衣にひそむか覇者の劍



三、秋静肅の山裾に

月影冴えて丘に満つ

野々木を愛しむ健き子が

蘭陵湖上にうそぶけば

せんてつ

先哲意気こうじてか

山こだまする秋孤吟

しゅうこぎん

四、右手に理想の星をはき

ゆんで

めて

左手には理想の花を摘む

かんばせ

花の顔よそおいて

宴に集う健き子が

氷雨につづる清陵史